



少数派運動に誇りをもつて



私たち労働者は情勢だけを見て、資本主義の攻撃に打ち負かされてはなりません。三池の大闘争も原点は私の経験からも「少数者運動」でした。その少数者運動を担った方々は、労働者の誇りと自覚をもって学習運動に鍛えられた労働者の圧倒的多数の団結で、巨大な三井資本に立ち向かい、階級的な労働運動を作り上げてきました。「決してゼロではない」という出発点を三池労働者運動が教えてくれます。

思えば、労働大学の出発と同時に向坂逸郎学監の指導がありました。向坂学監は労働者が自分の頭で考え、さらに、マルクス・エンゲルス・レーニンの古典に学ぶことを常に指し示しておりました。それは労働者が「闘い」の主体であること、「社会の主人公だ」ということ

を三池闘争・三池労働者運動で示し、その後、国労・全通・全電通・日教組に引き継がれ、労働大学が掲げてきた「学習 反合理化 社会主義」の正しさが証明されます。

残念なことに、社会主義への道を指導されてきた坂牛哲郎学長が3月、逝去されました。その著『社会を変える、自分を変える』・『日本はどこへゆくのか』によって階級的労働運動の再生を指導されその足跡を残されました。ご逝去にあたり哀悼の言葉を送ります。

労働者運動を「点から面」の闘いに重層的に高めるためには、労働大学、労働大学まなぶ友の会運動の担うべき役割が重要であると考えます。なお、4月に開いた第17回労働大学総会の成功を勝ち取りました。

労働大学企画編集委員 川野 房雄